

畫夜二郡興行  
物乞の人情筆襦褌



藤橋つ匠

夜樂齋

戦決も日今



戦決も日明

# 乍憚口上

梅も蕾み早や如月の頃と相成申候處四方皆々様には銃後愈々御健勝の段奉賀候

陳者當座は引續き連日の好況を以て打續け申候段偏へに御最眞の賜ものと篤く御禮申上候 就ては引續如月興行として晝夜二部制のもとに夫れ々狂言に充分の選擇を加へ愈々當座獨得の重厚味を發揮仕り此度は又吉田榮三、吉田文五郎兩師に對し朝日賞を賜はり候記念の壹幕をも差加へ一座懸命の奮闘を以て相勤め尙又野澤吉季改め五代目野澤市治郎の改名御披露をも申上げ一層賑々敷開演仕る可く候間何卒相變らず御引立を賜はり度伏して御願申上候

昭和十八年二月

四ツ橋畔

文 樂 座 敬白

昭和十八年二月一日初日  
初日晝十一時・夜四時  
毎日晝十二時・夜五時 二部開演

## 御觀覽料

晝の部  
一等席 二圓 五十錢  
二等席 一圓 三十錢上り  
三等席 五圓 二十錢  
(各等入場稅別)

夜の部  
一等席 三圓 五十錢  
二等席 一圓 三十錢上り  
三等席 六圓 十五錢  
初日各等約二割引  
(各等入場稅別)

一等御座席 五日前より  
一等椅子席 是日  
前賣切符發賣致し居ります

前賣切符専用電話南 ⑦④ 三七〇三番  
一般御用の電話南 ⑦③ 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。



吉田 五郎



吉田 三榮



豊古太夫人

謹啓 此度吉田三吉田文五郎兩師の舞臺生活六十年を顯彰せられ  
朝日新聞社より昭和十七年度朝日賞を受賞せられ申候段御兩人の光  
榮は申すに及ばず文樂座一同の光榮として誠に感激に堪えざる次第  
に有之候就ては此上は一層愈々奮勵の上此御鴻恩に酬ふ可き決心に  
有之此段御禮旁々一言御挨拶を申添え申候

昭和十八年二月

文樂座櫓下

二世 豊竹 古靱 太夫

敬白

四方皆々様には愈々御機嫌うるはしく被遊候段奉賀候  
陳者今般朝日新聞社より昭和十七年度朝日文化賞として私共の舞臺  
生活六十年に對し過分の御賞を賜はり候段身に餘る光榮と深く感銘  
罷在る次第に御座候斯やうに相成申候ことも偏へに平素皆々様御最  
眞の賜ものとして今更ながら御鴻恩の程御禮の言葉も之れ無き次第に  
御座候就ては當二月興行にては受賞記念として「義經千本櫻」道行  
初音旅を相勤め申すべく此上は尙一層老齡に鞭打つて斯道精進の決  
意に有之候間相變らず御引立の程を偏へに御願奉申上候

昭和十八年二月

敬白

吉田 三榮  
文五郎



【畫之部】

狂言し 一谷嫩軍記



敦盛出陣の段

口竹本 津磨太夫  
鶴澤友十郎

中 竹本 播路太夫  
鶴澤本 叶太夫  
野澤八司太夫

後 竹本 難太夫  
鶴澤本 友太夫  
鶴澤友平

人形役割

敦盛出陣の段  
陣門の段  
須磨浦の段  
組打の段  
脇ヶ濱の段  
熊谷陣屋の段

寶曆元年十二月十一日(二四一一)から初めて豊竹座に上演された。作者としては淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豊竹甚六等五人の名を連ねてゐる上に故人並木宗輔の名をも掲げてゐる。(並木宗輔は寶曆元年九月、本曲の第三段目までを作つて歿し、そのあとを他の淺田一鳥等が追加して成つたと云はれてゐる)その主材は平家没落の哀史中、一谷に於ける平敦盛と熊谷直實との組打、藤原俊成と平忠度との訣別、平忠度と岡部



平山武者所 吉田玉徳  
 熊谷次郎直實 吉田玉造  
 無官太夫敦盛 吉田榮三郎  
 須磨浦の段 豊竹呂賀太夫  
 鶴澤寛治郎

人形役割割

玉織姫 桐竹紋司  
 平山武者所 吉田玉徳  
 組打の段 竹本住太夫  
 野澤吉三郎

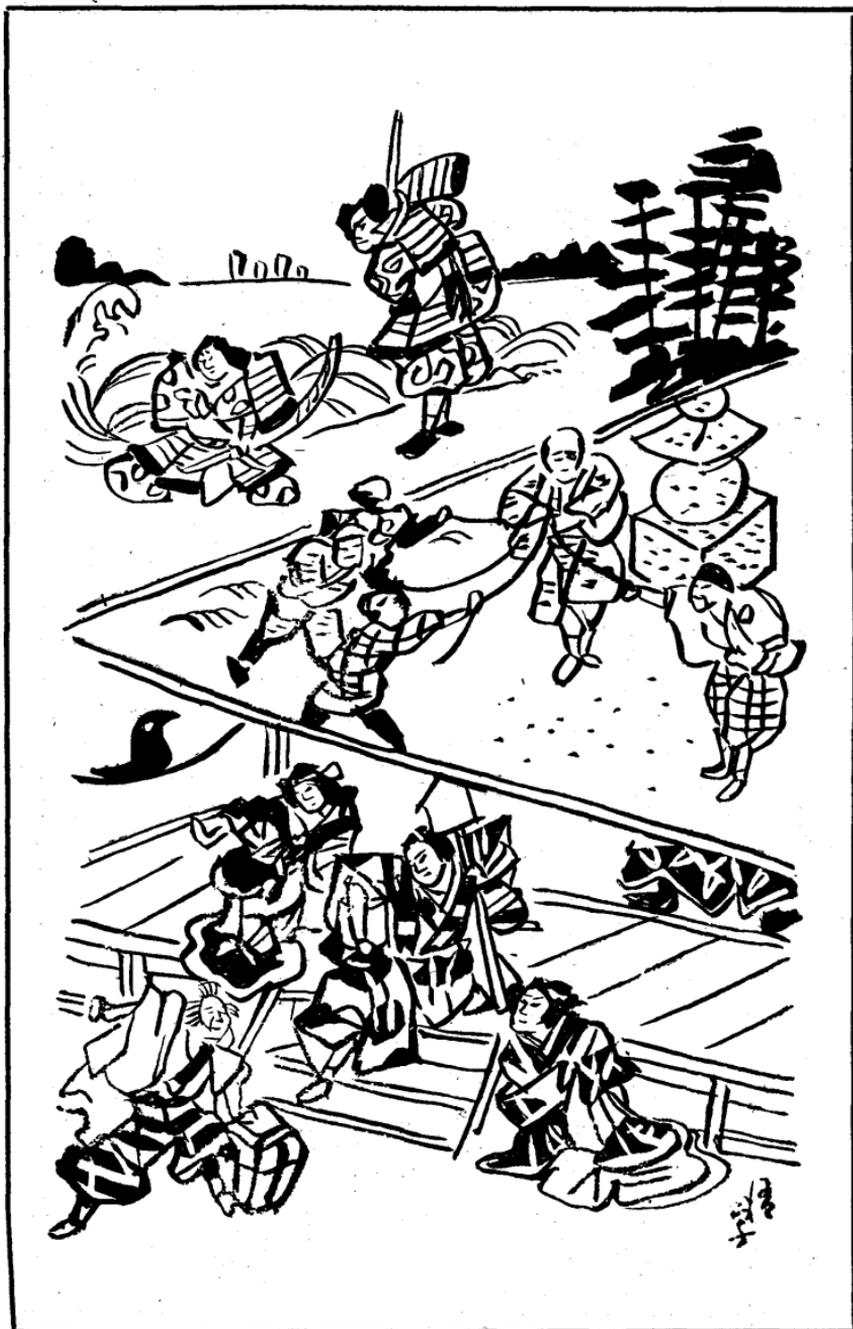
人形役割割

無官太夫敦盛 吉田榮三郎  
 實ハ小次郎直家

侍女達の應戦に、五郎の軍勢は散りくになり、藤の方の矢先きに五郎は射殺されてしまった。藤の方は侍女と共に平家一門の落ち行く跡を慕うて船場の磯へ急ぐ。

無官の太夫敦盛は養父經盛に代つて一谷の要害を固めてゐた。三月初旬の暗夜。小次郎直家は先驅して初陣の高名を顯はさうものと一谷の陣門に突進した。然し折からの城内に起る管絃の音に心耳を澄まし物のあはれに打たれて鬪志は鈍つた。この時平山武者所が駒を早めて驅け來り先陣を譲ると呼ばはつた。血氣にはやる小次郎は其の詞にふはと乗り遮二無二敵陣に肉薄した。熊谷直實は愛子を見失うて狂へる獅子の如く單身城内に突入し直家——實は敦盛を救ひ出し手負ひと偽つて連れ歸へつた。

卑怯な平山は直實父子を戦死させようとして當が外れ、敦盛——實は直家等に切立てられて逃げ



熊谷次郎直實 吉田玉造

平山武者所 吉田玉徳

玉織姫 桐竹紋司

軍兵 大ぜい

脇ヶ濱の段

石屋彌陀六 竹豊 竹富太夫

齒ぬげの與次郎 竹本隅若太夫

昆沙の五左衛門 竹 竹本雛太夫

吃の又平 豊 竹つばめ太夫

雀の忠吉 竹 竹本播路太夫

雀の丹兵衛 豊 竹本司太夫

咽の忠兵衛 豊 竹本津磨太夫

番場の忠太 竹本松島太夫

須の段運平 竹本越名太夫

る。途中、敦盛を尋ねる玉織姫を見付けて之れを捕へ、我が意に従はせようとして拒まれ、怒つて姫を刺した。

敦盛——實は直家は御座船の後を慕ひ、須磨の浦波に駒を乗入れ、鞭をあげて進む。熊谷直實之を望見し、扇をあげて磨き返へし勝負を挑んだ。若武者は駒を引き返へした。そして濱邊に二人は組み合ふた。直實は相手を組敷いてしまつたが、出来れば逃してやり度く思つた。しばしためらう熊谷を眺めた平山武者所は平家方の大将を組み伏せ乍ら命を助け様とするのは二心に紛れないと叫んだ。今は是非なく直實は念佛唱へて若武者の首を掻き切つた。そして曇り聲を張り上げて「平家方に隠れない無官の太夫敦盛を熊谷直實が討取つた」と呼ばはつた。

平山の爲めに深手を負ふて磯に倒れてゐた玉織姫はその聲をきくとむつくと起きてその首に縊りつき來世の幸せを願ひつゝ死んで行つた。直實は

藤の局 豊竹呂賀太夫  
 庄屋彌作 豊竹千駒太夫  
 豊澤新左衛門

あはれに打たれた。世の無常がひし／＼と胸に刻み込んで来た。

人形役割割

石屋彌陀六	吉田玉助
齒ぬけの與次郎	吉田兵次
雀の忠吉	吉田藤一
咽の丹兵衛	吉田常次
毘沙の五左衛門	吉田龜夫
吃又平	吉田萬次郎
娘小雪	桐竹紋司
藤の局	桐竹政龜
番場の忠太	桐竹紋太郎
須の股運平	桐竹紋之助
庄屋孫作	桐竹龜松
庄屋孫作	吉田光之助
雑兵	大ぜい

(替日毎役)

攝州御影の里に石屋がある。其の主人の額に黒子があつて、恰も阿彌陀如來の白毫に似、佛道に歸依して同職仲間と念佛講を作り、常に念佛を唱へてゐるので人呼んで白毫の彌陀六といふ。

一人の美しい若者がこの石屋に石碑を頼んでゐた。その若者に彌陀六の娘小雪——實は養女で平重盛の娘であるが——が戀をした。然し遂げられぬ戀と知つて若者は娘に赤金緞の袋に入れた青葉の笛を與へたのである。

彌陀六はこの若者と連れ立つて濱邊近くに建てた眺への石塔を検分してゐたが、何時の間にやら若者の姿は消えてしまつた。

折節娘小雪は若者を慕ふてこの濱邊へ駆けつけ與へられた形見の笛をみせるのだつた。

その折、藤の局は梶原景高の兵に追はれて逃げ

熊谷陣屋の段

前豊竹呂太夫  
 豊澤仙糸  
 切竹本大隅太夫  
 鶴澤清二郎

人形役割割

熊谷次郎直實	吉田玉造
妻相模	桐竹龜松
妻相模	桐竹龜松
堤軍次	桐竹紋司
藤の局	桐竹政龜
源義經	吉田玉市
梶原平次景高	吉田多三郎
石屋彌陀六	吉田玉助

(替日毎役)

て来て、青葉の笛をちらとみて、「それは我が子  
 敦盛の秘藏の笛。如何してそれが手に入った」か  
 と問ふ。居合せた石工等はこれをきくと「その敦  
 盛様は須磨の浦で討死なされた」と熊谷直實との  
 組打ちの顛末を語るのだつた。局ははじめて我が  
 子の戦死を知り愁歎に暮れる。

梶原の郎黨達が局を追つて来た。彌陀六は石工  
 達と共に藤の局を逃して郎黨達と争ひ、須股運平  
 と云ふ士を叩き殺してしまつた。

驚いて駆け付けた庄屋の孫作を先きに立て、彌  
 陀六始め石工達は人殺しの申し開きに熊谷の陣所  
 へと出掛けて行く。

熊谷直實の妻相模は武藏に残つてゐたが、子を  
 案じ夫を慕ふて百里餘りの長旅をつゞけ、一谷熊  
 谷の陣所に辿り着いた。

藤の局は敵に追はれて熊谷の陣所とは知らず逃  
 げ込み、かつて憐みをかけた相模に邂逅する。そ

して共に宮仕へしてゐた時の昔語りや、その時共に懐胎してゐた事などを話して互に奇遇を喜んだが、今の身の上を語り合ふ中に、相模が熊谷直實の妻であるときいて驚き、その直實は我が子敦盛を殺した敵。舊恩を忘れずば助勢を頼むと哀願する。

相模はこれを慰めて武士道を説き、戦場に愛し子を送る母の心懸けを述べた。然しその實直實は義經が己れに與へた高札の文言「此華江南所無也……伐一枝者可剪一指……」とあるので、敦盛を助けようとする義經の諷意を察して、我が子小次郎直家を敦盛の身代りに立てた事が判明すると、忽ち、藤の局と相模との喜悲は轉倒するのであつた。

蔭からこの様子を知つた梶原景高、鎌倉へこの事を知らさうとて駆け出す所を、彌陀六が打つた手裏劍に果敢なくも殺された。

義經の恐るべき眼力はこの彌陀六が彌平兵衛宗

清であることを看破る。然し情けある義經の計みにより、宗清は藤の局と敦盛とを連れ去る。直實は無常を感じて世捨人となり、妻を伴つて佛道修行の旅に出る。そして義經は戰場へと赴く事となり、各人の心とりどりに哀愁に打たれ乍ら引別れて行くのであつた。



【夜之部】

關取千兩幟

猪名川内の段



猪名川内の段

おとわ竹本重太夫  
 猪名川竹本濱太夫  
 大阪屋(竹豊)竹本富太夫  
 呼遣ひ(竹豊)竹本播路太夫  
 鐵ヶ嶽竹本七五三太夫

明和四年八月(二四二七)大阪竹本座初演。作者は近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛。全曲は九段よりなり、その中第二段猪名川内から相撲場の段が有名である。出處は當時大阪で人氣力士として最眞の血を湧せた稻川と千田川とに絡ませて「雙蝶々曲輪日記」(寛延二年(二四〇九)七月竹本座上場。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳)の力士達引を翻案して趣向を凝らしたるもの。尙、原作では力士の猪名川は岩川とあるが、文政九年二月(二四七九)座摩境内の興行の時から、猪名川と改められて今日に及んでゐる。

梗概

猪名川が堀江の假住居には最眞客からの祝儀の

人 形 役 割

胡弓 鶴澤友三郎  
 豐澤廣助

女房 おとわ 桐竹紋十郎

猪 名 川 吉田光之助

鐵 ケ 嶽 吉田玉造

大 阪 屋 吉田兵次

呼 遣 ひ 吉田萬次郎

贈物が賑々しう飾つてある。往來の人々は其の威勢よいのを見乍ら猪名川の全盛を譽めたゝへて通る。内で之を聞く猪名川の女房おとわの顔は輝いてゐる。

敵方の力士鐵ヶ嶽を伴つて猪名川が歸へつて來たので、おとわは之を迎へて愛想よく會釋する。折節、大阪屋から使ひが來て「錦木身負けの殘金を今日中に拂つて欲しい。明日になつたら據所無く他の身請客に渡さねばなりません」と云つて歸つた。

猪名川は「これは大變、錦木を他に身請けさせて俺の顔が立つものか」と駈出す。

鐵ヶ嶽は聲を掛け「これ猪名川、ちよつと待て其の身請け客は外でもない俺だ」といふ。

猪名川は、さては彼奴め九平太の手先となつて錦木を身請けしようとしてゐるのかと知り「鐵ヶ嶽よ、一生の頼みだ。俺が受合つた身請けの殘金二百兩の調達に窮してゐる苦衷を察して、九平太が



朝日文化賞受賞記念上演

義經千本櫻

道行初音旅



道行初音旅

靜御前 竹本伊達太夫  
狐忠信 竹本織太夫

〔豊〕竹本 雛太夫  
つばめ太夫

〔豊〕竹本 播路太夫  
司太夫

〔豊〕竹本 富太夫  
三瀧太夫

昭和十七年度朝日文化賞受賞の譽を擔ふた吉田榮三、吉田文五郎の兩巨頭が、舞臺生活六十年に及ぶ藝道精進の精華を遺憾なく發揮する絢爛豪華の一場面「道行初音旅」を特に朝日文化賞受賞記念としてこゝに上場することになつたが、この曲は延享四年（二四〇七）十一月十六日から初めて竹本座に上演されて大當りであつた有名な淨瑠璃「義經千本櫻」の一齣で、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。全五段からなるその第四段目に當り川連館へと續く場面で、

義經が難波津を船出して難風に遭ひ、今は吉野山に隠れてゐるとの噂を耳にした靜御前は源九郎狐の化けた佐藤忠信を伴ひ大和路をさして旅に出る。春めく四方の景色。そして、

人形役割割

狐 静  
 忠 御  
 信 前  
 吉 吉  
 田 田  
 榮 文  
 三 五  
 郎

野 澤 喜左衛門  
吉季改め  
 野 澤 市治郎  
 (野) 鶴 澤 清 糸友  
 (野) 鶴 澤 清 糸友  
 鶴 澤 徳 若  
 (竹) 豊 澤 仙 團 松作  
 豊 澤 猿 二 郎

義經の形見の初音の鼓を携へた静御前と義經から拜領した鎧を脊負ふた忠信。その風雅な姿はさながら麗はしい繪巻物を展げた様であつた。二人は人目を避けては互に形見の品に見入り追憶の情に打たれつゝ花かぐはしい吉野山へと辿つて行く……。

と云ふ詩趣に溢れた舞臺である。

因みにこの四段目と共に二段目の渡海屋から大物ヶ浦、三段目の椎の木から小金吾討死につゞく壽し屋等が殊に有名である。

(床本) 道行初音旅

戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや忠とまことの武士に君が情とあづけられしづかに忍ぶ都をば後に見捨てゝたびだちてつくらぬなりもよしつねの御行末はなにはづのなみにゆられて、たゞよひて今はよしのと人づてのうはさを道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見渡せばよもの梢もほころびて梅が枝うたふうたひめのさとの男が聲々にわがつまが、てんじやうぬけ

てすえるせん、ひるのまくらはつがもなや、天じようぬけ  
 てすえるせん、ひるのまくらはつがもなや、つがも  
 なや、おかしからすの一ふしに人も、わらやのそだち  
 も春ははねつくてまり、ひいふうつくづくときけばこち  
 風音そへて、こぞの水を徳若にごまんざいと君もさかへ  
 ましますありけふありやたのもしや。さぞなやまとの人  
 ならば御かくれがをいざ問はん、われも初音の此つどみ  
 君のさかへを壽ぎて、むかしを今になすよしもがな、た  
 にのうぐひすもはつねのつどみ、しらべあやなす音に  
 つれてつれてまねくさおくればせなる忠信が旅すがた、  
 せなに風呂敷をしかとせたらおふて野みち、あぜみちゆ  
 らりく、かるい取なりいそいと、めだぬ様に道へだ  
 て女中の足とあなどつて嘸お待かね、こゝ幸ひの人目な  
 しとせいめいそへて賜はりし御きせながを取出し、きみ  
 と敬ひ奉る、静はつどみを御顔とよそへて上におきの石  
 人こそ知らぬ西國へ御げここの御海上、浪風あらく御船  
 を住吉浦に吹上られ夫よりよしのにまします由、やがて  
 ぞ参り候はんとたがひにかたみをとりにおさめ雁とつばめ  
 はどちらが可愛やを育つるつばめが可愛い、花を見す  
 てるかりがねならば、ふみの便りも又の縁エ、そふじや  
 いなく、うたふ聲々面白や實に此鐘を賜はりしも兄繼信  
 が忠勤也誠にそれよ越方の思ひぞ出る境の浦の海に兵船

平家の赤旗陸に白旗源氏の强者アラ物々しやと夕日影に  
 長刀を引そばめ何某は平家の侍悪七兵衛景清と名乗かけ  
 〳〵なぎ立て〳〵なぎ立つれば花にあらしのちり〳〵ば  
 つと木の葉武者言ひがひなし出や旁々よ三尾の谷の四郎  
 是にありと渚に丁と打つてかゝる刀を拂ふ長刀のゑなら  
 ぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音。打合太刀の鎧元より折  
 て引汐歸るかり、勝負の花を見捨つるかと長刀小脇にか  
 い込で兜のしころを引掴み後へ引くあしよろ〳〵〳〵、  
 向ふへ行足たぢ〳〵〳〵むんづとしころを引切て双方尻  
 居にどつかと座す腕の強さと言ひければ骨こそ強け  
 れとハハ、ホ、ホ、笑し後は入亂れ手しげきはたらき  
 兄繼信君の御馬の矢表に駒をかけすへ立ふさがるオ、聞  
 及ぶ其時に平家の方には名高き強弓能登の守教經と名乗  
 もあへず、よつびいて放つ矢さきはうらめしや兄繼信が  
 胸板にたまりもあへず眞逆様あへなき最期は武士の忠臣  
 義士の名を残す思ひ出るも涙にて袖はかほかぬつゝ井筒  
 いつか御身ものびやかに春の柳生の糸ながく枝をつらぬ  
 る御ちぎりなどかはくちしかるべきとたがひにいさめい  
 さめられ急ぐとすれどはかどらぬ芦原峠かうのさとつち  
 だむつたも遠からぬのぢの春風吹はらひくもと見まがふ  
 三芳野の麓の里にぞつきにける。

# 伊賀越道中双六

沼津里の段



沼津里の段

切豊竹古靱太夫

鶴澤清 六

ツレ 鶴澤友衛門

胡弓 鶴澤清 友

## 人形役割

呉服屋重兵衛 吉田榮三

荷持安兵衛 吉田兵次

親平作 桐竹門造

娘およね 吉田文五郎

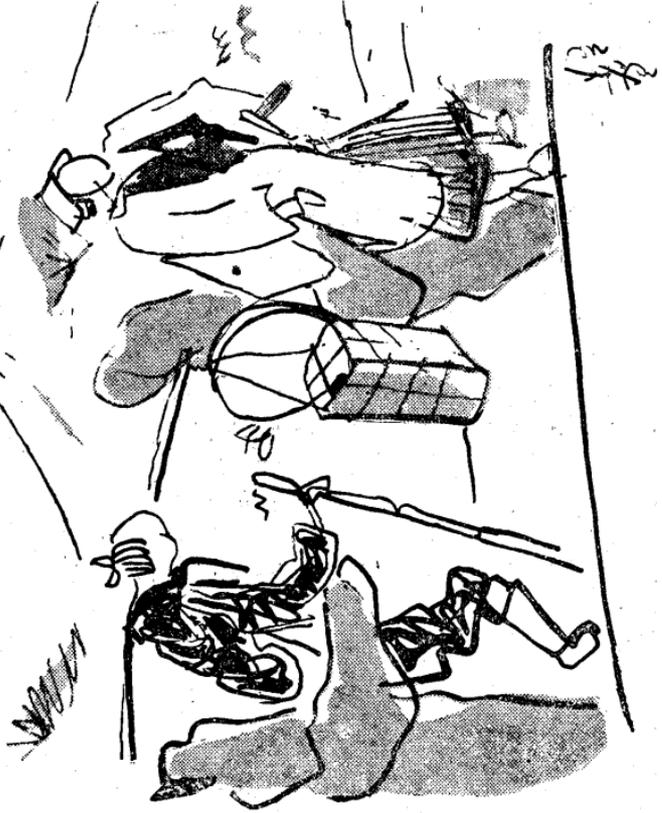
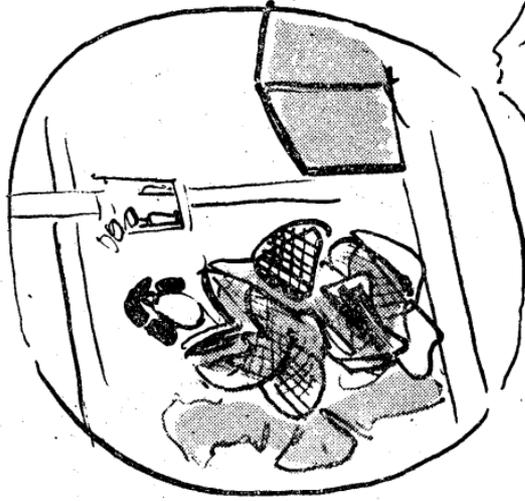
池添孫八 吉田玉徳

天明三年(二四四三)四月竹本座初演。作者は近松半二近松加作。忠臣藏、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので、近松東南作「伊賀越乗掛合羽」(安永六年三月||二四三七||豊竹此吉座上演)の改作で、全曲は第一鶴が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四群山宮居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中、第五、第八と共に、この第六沼津の段が知られてゐる。

## 梗概

鎌倉の商人呉服屋重兵衛は旅で、沼津の近くまで来たが、荷持の安兵衛を有事で元との道へ歸した。此驛の平作といふ爺に荷物を持たしたが年取つてゐるので思ふにまかせぬ内、石につまづき生爪を剝した。重兵衛は所持の薬をつけて勞つて遣る所へ娘お米が来た。委細をきいて重兵衛を我家

此処橋下曲豆竹古鞆太夫  
和五郎申作



へ迎へた。平作の家は貧しいくらしであつた。重兵衛今夜は此家に泊ることになつた。夜ふけた頃お米は印籠を盗む。目さめた重兵衛は仔細を問ふと、其身は以前江戸吉原の遊女瀬川の果てとわかり、夫渡邊志津馬が不慮の怪我を救ひたいばかりに最前父の傷が即座に治つた妙薬であるから盗んだと涙ながらに詫び入る。平作は盗みをするとは何事だ。幼ない時に養子に遣つたつた一人の兄にも濟まぬと嘆き悲しむ。重兵衛はその兄と云ふのは何者だと聞く。それは鎌倉八幡宮の氏子で幼名は平三郎、母の名は「とよ」と書いた守袋をつけてあると平作は語る。重兵衛はひしと胸に應へたがわざと名乗らず、次ぎの下りまでに石碑を建てゝくれとて金子を渡して行く。

その跡には印籠と臍の緒書きが残つてゐた。

平作は我子と知り、お米は澤井股五郎が持つた印籠と知つて驚く。千本松原へ追ひ付いた平作は股五郎の行衛を重兵衛に専ねるが重兵衛は股五郎に恩を受けた義理を思ふて容易に打明けない。平

作は遂に腹を切つて、死んで行く身に聞かしてくれと頼む。義理と恩愛の斷末魔に迫つた重兵衛は簀蔭に忍んだ、お米と池添孫八に聞かすやう「股五郎の落つく先は九州相良、吉田で逢ふたと人の噂」と云ふ。平作と重兵衛は相抱いて親子の名乗り、死に行く名残りに泣き入る。雨は一しきり降りつゞいて平作は落入る。

### (佐和利) 沼津里の段

私故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負ひ、一旦本腹有つたれど、此頃は頻りに痛み、色々介抱盡せども効無く立寄る方も旅の空、此近所で御養生、長しい間に路銀も盡き、其貢に身の廻り、櫛笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺も男の病ひが治したさ、先程のお咄しに、金銀づくでは無いとの噂、燈火の消えしより、あの妙薬をどうがなと思ひ着しが身の因果、どうぞお慈悲に是申、今宵の事は此場切、お年寄られしお前に迄、苦勞をかけし不幸の罪、ゆふは死なうか翌の夜は、我身の瀬川に身を投げんと、思ひし事は幾度か、死んだあともお前の歎きと一日ぐらしに日を送る、どうぞ御慈悲に御了簡と、東育ちの張もぬけ、戀の意氣地に身を碎く、心ぞ思ひやられたり。

# 繪本太功記

## 尼ヶ崎の段



### 尼ヶ崎の段

前竹本南部太夫

鶴澤重造

後竹本織太夫

竹澤團六

寛政十一年七月十二日(二四五九)から大阪道頓堀豊竹若太夫の芝居に上演された。作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒。全曲十四段よりなり、第十段目(十日目)の夕顔棚の尼ヶ崎の段が有名である。題材は明智光秀謀反の顛末を仕組んだもので「繪本太閤記」に據り脚色されてゐて、太閤秀吉に關する多くの戯曲中、最も世に知られたものである。尙、全十四段の構成は、所謂光秀の蘇鐵の諫言を發端にして、天正十年六月一日の安土城饗應の日の意趣から、本能寺の變となり、同じ十三日小栗栖に百姓の竹槍に哀れな最期を遂げるまでを十四冊に脚色してゐる。

### 梗概

父光秀との出陣を許された重次郎は今宵決死のおもひを胸に秘め、母操に又祖母臯月に、生來十

人形役割

武	智	重	次	郎	桐	竹	龜	松
嫁	初	菊	操	桐	竹	紋	十	郎
妻	さ	つ	き	吉	田	小	兵	吉
母	眞	柴	久	吉	桐	竹	政	龜
眞	武	智	光	秀	吉	田	玉	助
加	藤	虎	之	助	桐	竹	紋	太
軍	兵	大	ぜ	い				

八年の恩を謝せずには居られなかつた。

それと察した許婚の初菊は可憐にも重次郎に縋つて名残を惜しむのだつたが、重次郎はけなげにも、所詮討死のおのれと別れ、他家へ縁づきする様懇々と悟すのだつた。

しかし、初菊は乙女ごゝろの一筋にどうしてこれが思ひあきらめられやう、せめて今宵は凱陣をと云ひさして後はたゞ涙涙であつた。

時刻が移ると、重次郎は初菊のかひ添へで緋おどしの鎧も凛々しく装ひ立つた。

臯月と操は、今出陣の門出と、銚子盃の用意をし、重次郎初菊に酌み交させたのだつたが、これは祝言の盃であり、又今生の名残の盃でもあつたのだ。臯月の心中にしてみれば、なまなか出陣の止めだてをして、主殺し光秀の子として生き恥をかゝさうより、むしろ健氣な討死をさせた方がと苦しい計らひだつたのである。

折柄聞える攻太鼓、重次郎は、さらば、と初菊

を振り捨て、まつしぐらに戰場へと馳せ参じて行つた。

この様子をそつと伺ひ見た最前この家に宿をとつた旅僧は、さり氣なく、風呂の案内をするのでつたが、まあお先へと云はれるまゝに、又湯殿口へ入つた。涙を押しかくした老母、操、初菊の三人も奥へしばしと立つて行つた。

あとは遠近に鳴きしきる蛙の聲ばかり、その中を拔足さし足忍びよる簑笠をつけた武士。それは武智光秀であつた。最前この家に入ると見たのは僧形に身をやつしては居るものゝ正しく敵將眞柴久吉だつた。必定久吉この内と、門前の青竹をひつそいで竹槍を作つた。そして一と間に聞えるもの音、こゝぞと突込む槍先に、わつと叫んだのは眞柴にあらぬ老母皐月だつた。餘りのことに光秀も茫然とした。この騒ぎに操も初菊も奥からはしり出で、このあり様は何事と老母に取り縋つた。

皐月は苦しい眼を開き、叛逆人のわが子光秀を

たゞ人非人と罵り、その天罰は親に報ひ、この通り青竹のひつそぎ槍で最期をとげるのだ、と氣丈にも熱涙を揮つた。

操は又夫光秀に、門出の折の諫言をくりかへしせめて母御の御最期に善心に立ちかへつて呉れ、と夫を思ふ誠の涙にむせたのであつた。

強情我慢の光秀は、どうしてこれを受けつけやう。悪逆無道の小田春永を亡ぼすは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、と聲あらゝげて諫言を阻んだ。

その折しも表口から刀を杖に早くも手負の重次郎はよろめき／＼立ち歸つて、斷末魔の苦しい息を吐くのだつた。光秀は、わざと荒々しく、戰場の仔細を尋ねると、味方は久吉の家臣加藤清正勢に追ひ立てられ負け戦、四方天但馬頭は行方知らず、と云ふのである。さう云ふ中にも早致死期の老母と重次郎、初菊も操も身もだへして悲んだ。流石の光秀も、これにはこらへかね、はら／＼と

落涙するのであつた。

又もや聞ゆる劇しい人馬の物音に、光秀は物見へ上つて見廻すと、一面の千生瓢の旗印、さては久吉攻め寄せ來ると齒嚙みをする折、眞柴筑前守久吉對面せん、と奥より聲をかけたのは、以前の僧形とは打つて變つた武裝の久吉だつた。久吉は山崎にて時を移さず雌雄を決せんと立ち去らうとするので、光秀も、首を洗つて觀念せよ、と互に敵味方睨み合ひつゝ別れたのであつた。



燈

### 文樂座小史（昭和十八年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル



# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來  
舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はず、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

觀賞おぼえ

昭和十八年二月 日

通し  
狂言 一 谷 嫩 軍 記

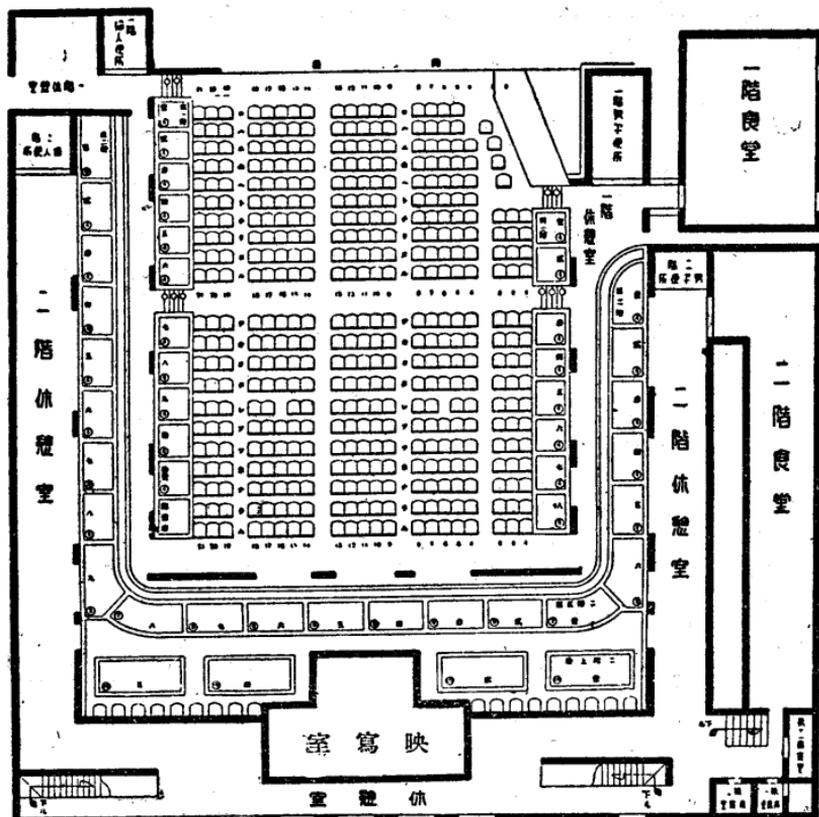
關 取 千 兩 幟

義 經 千 本 櫻

伊 賀 越 道 中 双 六

繪 本 太 功 記

# 文樂座御場席案内



御、観、覽、席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります。

切符賣場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

# 京阪神松竹系各座 二月興行お知らせ

大阪歌伎座  
八二八二 戎電

大歌舞伎二月興行  
每日晝正午  
夜四時半  
二部開演

一部觀劇料  
櫻席 一、八〇〇  
菊席 一、一〇〇  
三等席 二、〇〇〇  
二等席 四、〇〇〇  
一等席 (稅別)

大阪中座  
九七二一 南電

井上・水谷・合同劇  
日曜・祭日  
每日午後四時開演  
十一時・四時半・二回開演

御觀劇料  
五等席 一、一〇〇  
四等席 一、五〇〇  
三等席 二、〇〇〇  
二等席 三、〇〇〇  
一等席 四、〇〇〇  
特等席 (稅別)

大阪角座  
二一二二 南電

厚關西生歌舞伎大合同  
每日晝正午  
夜五時  
二部開演

一部觀劇料  
四等席 一、七〇〇  
三等席 二、〇〇〇  
二等席 二、五〇〇  
一等席 三、〇〇〇  
特等席 (稅別)

大阪辨天座  
八七二南電

大江美智子一座  
海江田讓二加盟  
每日正午より二回開演  
日曜・祭日十時開演

觀劇料  
平場椅子席 一、六九  
一等席 一、三〇  
(稅別)

大阪浪花座  
九五四一 南電

新興演藝特輯番組  
每日正午より二回開演  
日曜・祭日・十時開演

觀劇料  
階下席 九三  
階上席 一、六八  
(稅別)

大阪あべし劇場  
五八九三 戎電

一番安い笑ひの劇場  
每日正午より二回開演  
日曜・祭日・十時開演

觀劇料  
階下席 五四  
階上席 九三  
(稅別)

大阪大劇  
一三二 戎電

熱砂に咲く花  
十日朝鮮樂劇團  
十日大船の寶演  
ヨリ

同時封切映畫は  
愛の世界  
エノケンの土僕人  
ロツパンの彦左衛門  
三週 戦ひの街  
四週 護る影

京都南座  
五五一 國紙電

曾我廼家五郎劇  
每日午後四時開演  
日曜・祭日・晝間興行  
(正午より二回開演)

觀劇料  
四等席 一、五〇  
三等席 一、〇〇  
二等席 一、五〇  
一等席 二、九七  
(稅別)

神戶松竹劇場  
四〇四 川湊電

松竹家庭劇  
每日晝正午  
夜五時  
二回開演

觀劇料  
三等席 一、五〇  
二等席 一、八〇  
一等席 二、〇〇  
特等席 (稅別)

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に昔緒御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人情浮瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形浮瑠璃は

昔に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様は御期行に

背かねば、皆様に御満足して頂けるやうと一回不斷の努力を致して居りますが御節々氣付きの點は御各様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お扇子は椅子の下に

設備がありますからそれへお預り致します。お歸りは混雑致しますが

からお服物は成べく終演二幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お席にお立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ

此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事 は 西側廊下の階上、階下にお食堂と喫煙室が御座ります。

賣店 は 二階東側と二階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 貴方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と

二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口車側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御申附

下さい、其他一般従業員に不行用の點は御遠慮なく御注意の程お願ひ

いたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから豫め御諒承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内係を特設いたしました。

人形浮瑠璃についての御質問・各種團體御覽賞會・又は諸種の御

會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上りする事に

致しました。御一報次御容上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑧三七八八番

松竹株式會社

支配人

文樂座

下村清次郎

一部

金二十錢

昭和十八年一月廿八日拜開 大阪市東區久左衛門町八番地  
昭和十八年二月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市東區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店内  
發行所 鳥江鏡也

大阪市西區土橋通二丁目十二番地  
發行所 永井日英堂印刷所

